

# HOPE 計画と三春の住まいづくり、まちづくり

独立行政法人建築研究所 住宅・都市研究グループ上席研究員 岩 田 司

## 1. 三春町の概況

三春は福島県の中央部、阿武隈山地の西裾の小さな谷間にある旧城下町（写真-1）である。西は郡山市に隣接し、郡山駅から磐越東線で2駅12分、自動車で15分程度の距離にある。

三春は坂上田村麻呂が奥州征伐の際、馬揃えを行ったとの伝承があり、町内には坂上田村麻呂を祭る田村大元神社がある。元々いわきから会津へ塩を運ぶ道と、白河から尾根伝いに二本松に抜ける奥州姫街道の交点に形成された宿場町であり、戦国時代に坂上田村麻呂の後胤を名のる田村氏がここ三春に城を作るに至り、以降この田村地方の政治経済の中心地として発展する。古来良馬の産地であり、馬をかたどった郷土玩具としての三春駒も有名である。

この時期に行われた三春の町割り（図-1）が、現在の三春の町を形作っている。そのため町内には神社仏閣が多く、また裏道を中心に多くの土蔵が存在する（写真-2）。遊郭跡（写真-3）も現存しており、歴史が感じられる町であり、東北の小京都、小鎌倉と言われた町である。

現在の三春町は、昭和30年にこの城下町を中心とした三春町（以下旧町内）に周辺の

5村が合併して成立した。面積は72.76km<sup>2</sup>、戦後すぐには3万人を超える人口を抱えていた



写真-1 小さな谷間の町 三春  
(国際航空業作成)

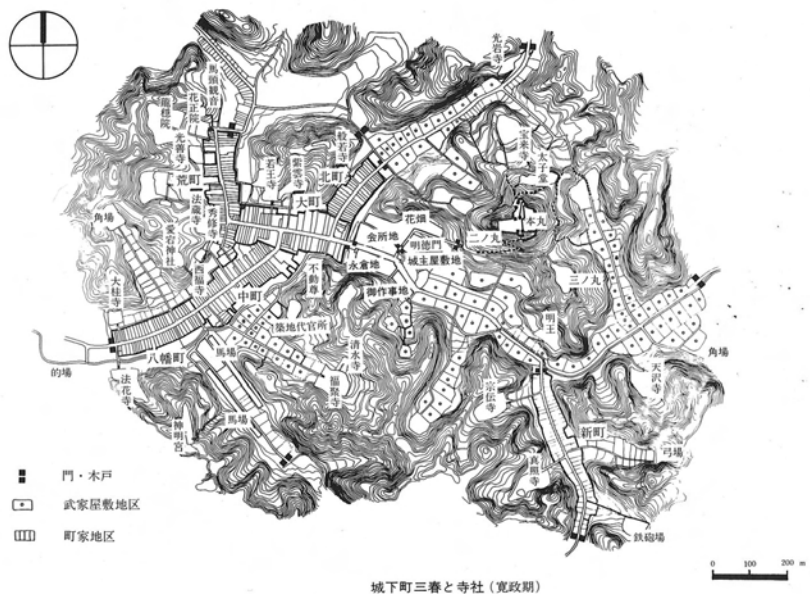


図-1 寛政時代（1800年頃）の三春の町割り  
(三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月)



写真-2 三春の蔵並



写真-3 遊郭跡

が、平成22年の国勢調査によると人口は18,191人、世帯数は5,502世帯となっている。

このうち旧町内には全体の約1/4にあたる1,471世帯4,194人が暮らしており、旧町内の周辺に出来た新市街地（住宅団地）に764世帯2,274人が生活している。約6割にあたる3,267世帯11,723人は周辺の農村部に暮らしている。

65歳以上人口は全町で26.18%であるが、旧町内で32.27%、新市街地で14.82%、農村部で24.78%であり、旧町内での高齢化率が、農村

部より高い。これは農村部であっても郡山に近く利便性が高く、郡山に職場を持つ人が多い現在、新市街地と共に農村部に住宅を求める人が多く、土地の売買が活発ではない旧町内では高齢化が進行しているものと思われる。

## 2. 三春、まちづくりの萌芽

昭和58年度に建設省（当時）住宅局の補助事業として、地域住宅計画、いわゆる HOPE 計画（以下 HOPE 計画）がスタートする。地域自らが計画を立案し、それを実行する、そのための計画策定費への補助は当時としては画期的な事業であった。三春町もこの事業に昭和58年度取り組むこととなった。

昭和57年度に三春町では都市計画が決定される（図-2）。写真-4にあるように、三春は小さな谷間の町であり、緑豊かな小さな山々に囲まれている。この山々の緑が、緑豊かな三春の景観を決定づけている。この都市計画ではこれら山々に風致地区が設定されており、すでに HOPE 計画策定前から、三春のまちづくりに対する姿勢が伺える。

また一般に商業地域に設定される防火地域等が三春では設定されていない。これは三春では木造が一般的であり、伝統的な建物も多いこと、また地元の大工による施工では木造が一般的で



写真-4 緑豊かな山々に囲まれた三春の街並み



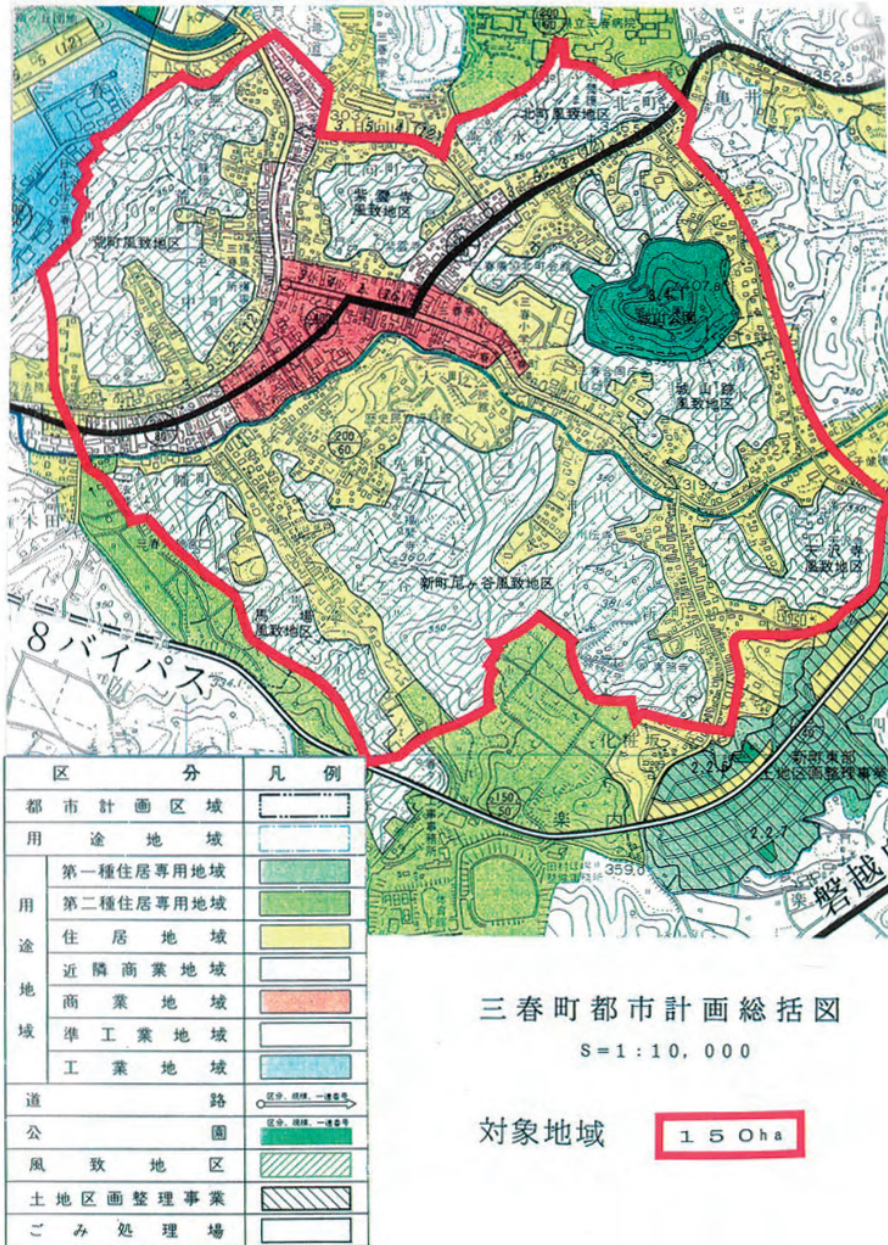


図-2 三春町都市計画図

あることによる。

古い歴史を持つ三春には、「三春大工」という言葉がある。町内には古くから、豆腐屋、素麺屋と並び、大工、建具屋といった職人が多く住んでいたといわれている。HOPE 計画策定当時、設計を専門とする事務所も人口2万人の町にしては多く、町内に5事務所存在した。

古来三春の周辺地域の田村地方にある建築の多くを三春の大工が請け負っていたという事実

があり、三春におけるまちづくり、すまいづくりを自らの手で実践できる素地が三春にはそろっていたといえる。

HOPE 計画の目指すところは、以下の3つである。

- ① 地域の特性を踏まえた質の高い居住空間の整備
- ② 地域の発意と創意による住まいづくりの実施
- ③ 地域住宅文化、地域住宅生産等にわたった広範な住宅政策の展開

この3つの内、風致地区の設定は①に、三春大工による木造のまちづくりは②、③に通じるものであり、HOPE 計画策定前から、計画策定のための条件の一部が整えられていたといえる。

一方、当時三春生まれの故大高正人氏の設計により、三春町立体育館、三春町歴民俗資料館の建設が行われ、質の高い公共施設の建設によるまちづくりが行われていた。こ

れはその後の新しい教育システムを導入した建築家による三春の小学校、中学校の建設や、大高正人氏による町民センター「まほらホール」の建築という一連の三春の質の高い公共建築建設へとつながっていく。

このような中、三春町ではまちづくり全般の指導を大高先生に相談したところ、渡邊定夫氏（東京大学名誉教授：当時東京大学工学部都市工学科助教授）を紹介され、以後、渡邊先生を

中心とした HOPE 計画によるまちづくりが推進される。

### 3. HOPE 計画推進の原動力

地域の住宅生産体制の中心をなすのは地元の建設関連業者である。住まい、まちづくりの両方を行うためには、設計、大工、工務店の他、土木、造園関連の業者も必要である。三春町は小さな町であり、HOPE 計画を策定するにあたり、これら地元の建設関連業者全てに声をかけ、「三春町住宅研究会」を結成した。この三春町住宅研究会は、HOPE 計画策定において、その調査を東京大学工学部都市工学科渡邊研究室と共に実施し、計画策定に大きな役割を果たした。また昭和61～63年度に同じく三春町が策定した HOPE 計画推進事業において、三春の中心市街地における建物の景観計画を当事者である地元住民、及び商工会と共につくりあげた。

この景観計画によるまちづくりを推進するため、平成元年度に「うつくしいまちをつくる三春町景観条例」が制定され、この条例に基づく「景観審査委員会」がつくられた。また三春町には「住宅相談室」が設置された。このように三春町では、「専門家」、「三春町」、「地元の建

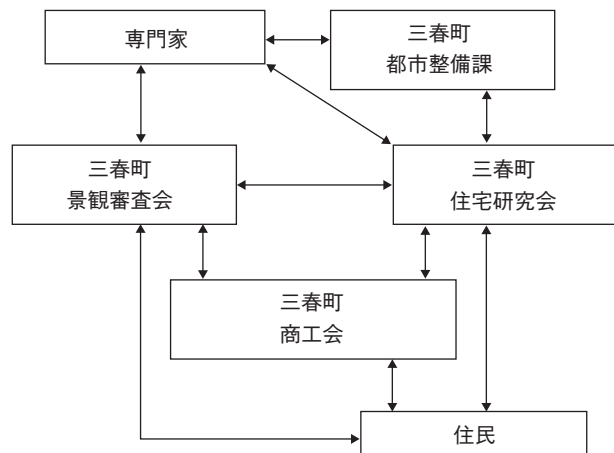


図-3 三春のまちづくりの構図



写真-5 完成した新しい三春の街並み

設関連業者」と「住民」によるすまいづくり、まちづくりと景観整備の手法が整えられた（図-3）。

三春のようなまちづくりでは、まちを構成する一軒一軒のすまいづくりによってその景観が形成される。「三春町住宅研究会」は、地元のすまいづくり、まちづくりを直接行う人々の集まりであり、一軒一軒施主と相談しながらすまいをつくっていく人々である。

専門家の指導、住民参加とともに、この地元の建築の専門家である地元の建設関連業者のまちづくり全般への参画は、今でこそ多くの地方公共団体のまちづくりにおいて一般的に行われているが、当時としては画期的なものであった。

そしてこの三春町住宅研究会と、商店街の住民の参加の下、三春町の最も中心部である「大町地区」の街路整備事業が平成16年度に完了した（写真-5）。

### 4. 住みよい住まいによるまちづくり

三春町では単に景観整備のみではなく、町が持続的に発展するためには、住みよい住まいによるまちづくりが必要であると考えた。ここでは街路整備事業を行った中心市街地をその手法



の例として以下に記す。

三春町住宅研究会では、東京大学工学部都市工学科渡邊研究室と共に、商店街において、日頃生活上困っていることを中心にヒアリングを行った。

ヒアリングの結果、中心市街地では間口が狭く、奥行きが長い、いわゆる短冊形敷地であるため、隣棟間隔が狭い。新しく家を建て替える際に、昔ながらの平入り（道路に平行方向に棟を持つ切り妻型の屋根をかけ、屋根の平側が表通りに面していて、平側から家に入出入りする建物：以下平入り）にすると奥行きが長いので、屋根が高くなり、建設費がかかることになる。そこで、最近妻入り（敷地の奥行き方向に棟を持つ切り妻型の屋根をかけ、屋根の妻側が表通りに面していて、妻側から家に入出入りする建物：以下妻入り）の建物が見られるようになったが、隣地側に屋根が傾斜しているため、狭い隣棟間に雪が落ち、壁や窓、エアコンの室外機を壊してしまうという問題が多いことがわかった。また三春は冬期夜間に氷点下になり、隣棟間には日がほとんど当たらないため落ちた雪や氷が溶けず積もり、その結果奥の部屋の窓が開けられなくなる、あるいは雪に排気筒が埋もれてしまうためにFF式のファンヒーターが使えなくなる。さらには夏期も含めて雨の日には、隣

棟間隔がほとんど無いため、隣家の壁に雨が当たり、外壁を汚す、あるいは建物の寿命を短くすると言った問題点も指摘された。

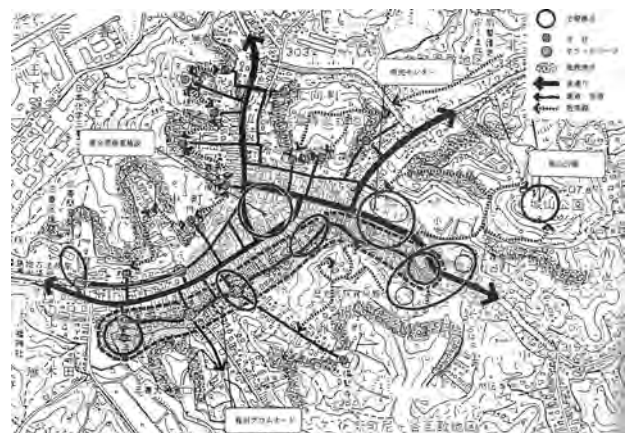
日本海側の新潟中越地方から青森にかけての日本海側の豪雪地帯には妻入りの建物が連なる街並み（写真－6）が見られるが、これは豪雪地帯であることから、玄関先に雪が落ちると雪かきが大変なこと、また一度大雪が降ると隣同士の雪が連続し、隣棟間に落ちず、屋根の上に雪がたまる。あるいは豪雪地帯では平入りの街並みであろうと、妻入りの街並みであろうと雪下ろしが必要で、その際に妻入りであれば道路に滑り落ちる危険が少ない。以上のような利点があり、これらの地方では妻入りの街並みが多い。一方京都をはじめとする我が国の町家地区の街並みでは妻入りの街並みは少なく、平入りが一般的であるが、これはやはり雨仕舞いの必要性のためである。

三春の場合はそれほど雪が降るわけでもないので、平入り形式の建物にすることとした。すなわち隣の敷地に対する迷惑を最小限にするための決まり事である。

また中心市街地では裏道や横丁、あるいは神社仏閣へと続く参道がある。裏道は短冊形の敷地の一番奥にあたり、土蔵が建ち並ぶ。また山



写真－6 豪雪地帯にある山形県金山町の街並み



図－4 三春の都市構成と道の性格  
(三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月より)

側などには小さな敷地があり、住宅が建っている。このように表通りの商店街とは違い、道幅も狭く静かなヒューマンスケールな空間である。

横丁はこれらの表通りと裏通りをつなぐ道である。短冊形の敷地に立つ町家の側面になるが、一部は貸されたり、切り売られたりして、居酒屋や小料理屋など、小さな店になっている場所がある。またこの横丁の一部が小高い裏山のちょっとした平場に立つ神社仏閣へと続く参道となっている（図-4）。

このような道の性格を生かした町づくりを三春町のHOPE計画策定報告書は提唱している（図-5）。

① 表通りは商店街でもあり、正月のだるま市や夏の盆踊りなど、季節毎のお祭りも開かれる場所であり、賑やかさが演出できる通りとすると共に、隣棟間隔の狭い敷地で住みよさを考えた平入りの街並みを目指す（図-6、写真-5）。

② 表通りが交差する部分（図-4の○の部分）は東側は文化ゾーンとし、現在大高正人氏設計の町民センター「まほらホール」が建設された（写真-7）。また西側は商業核の形成を目指していた（図-7）が、昨年町外れにあったスーパーマーケットがこ

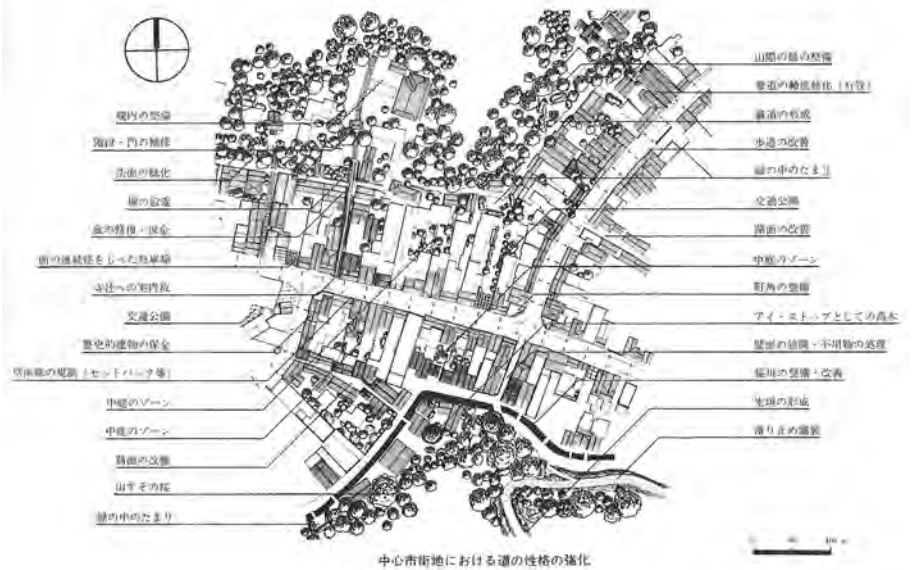


図-5 道の性格を生かした中心部のまちづくり  
（三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月より）

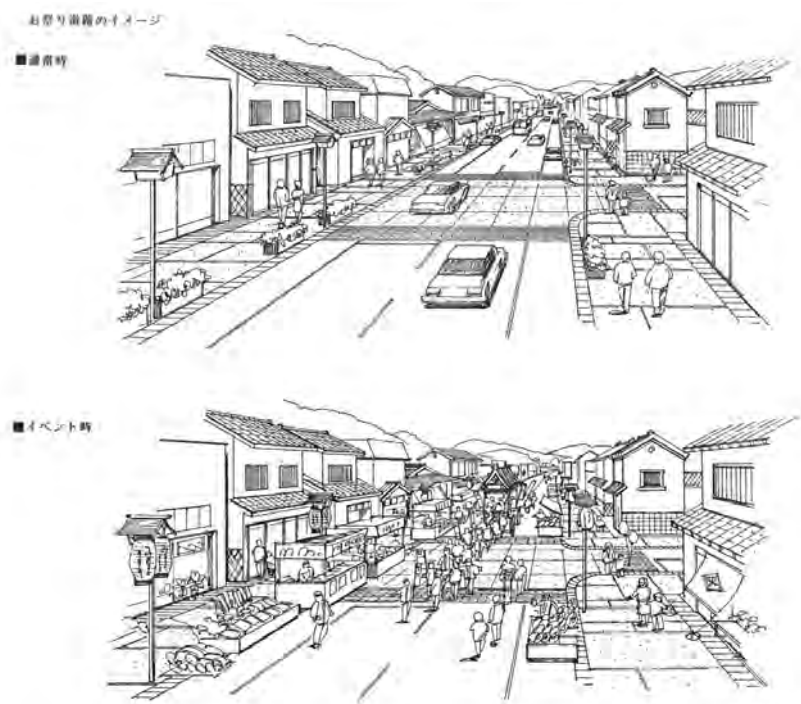


図-6 平入りの街並みによる賑やかな表通り  
（三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月より）

こに移転し、まさに町の中心に日常品のそろった店舗が建設された。

③ 裏道は蔵並を生かしながら、住宅地であることを考慮し、歴史を感じさせる落ち着いた





写真-7 町民センター「まほらホール」



写真-8 街並み環境整備事業により整備された裏道

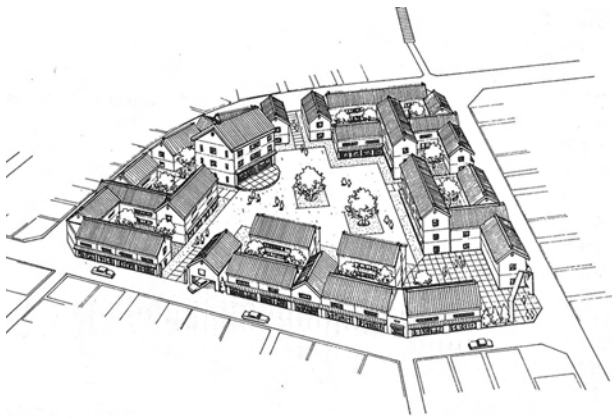


図-7 商業核の提案

(三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月より)

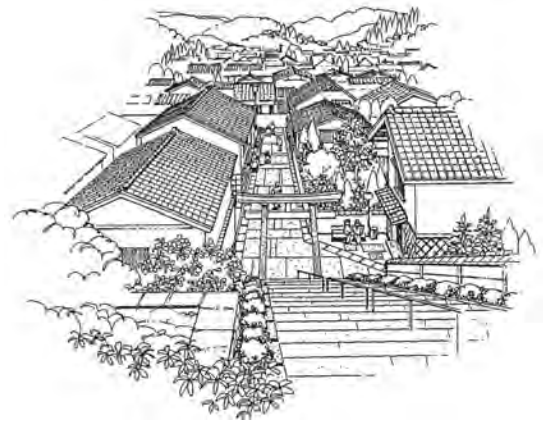


図-9 神社仏閣へと続く参道の整備

(三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月より)

桜川整備のイメージ



図-8 ヒューマンスケールで蔵並を生かした歴史が  
感じられる静かな裏道

(三春町地域住宅計画策定報告書：1984年3月より)



写真-9 紫雲寺へと続く石畳の参道と美しいなまこ壁

ヒューマンスケールな空間を目指す(図-8、写真-8)。

- ④ 参道は神社仏閣へと続く道であり、落ち着いた歴史を感じさせる道とする(図-9、写真-9)。

以上のように、住まいやすさを考慮した相隣環境のあり方や、道の性格を生かした空間作りを丁寧に行うことにより、三春の中心市街地は住みよい住まいによるまちづくりと、その美しい街並み空間の創出に成功してきた。

さらに町の中心にスーパーマーケットを誘致し、高齢社会における歩ける町を実現した。特に一般に郊外部に移転する傾向にあるスーパーマーケットを町の中心へ誘致できたのは、長年にわたるHOPE計画の実現を図るための継続的な商工会を中心とした地域住民の力によるところが大きい。

## 5. まちづくりシミュレーション

三春町住宅研究会ではHOPE計画の策定内容やHOPE計画推進事業で作成した中心市街の景観整備計画を、地域住民に良く理解してもらうために、模型によるまちづくりシミュレーションを行った。



写真-10 まちづくりシミュレーションでできた模型の街並み

この対象地区である「大町地区」のそれぞれの敷地毎に、住宅研究会の会員と東京大学の学生の一人一人を担当者とし、これまでの計画の中で提案された内容に沿って、それぞれが個別に建物を設計して、それを模型にして持ち寄って街並みをつくり、その結果について検討した。各敷地の施主の意向は、それぞれの敷地に住む家族構成を考慮して、住宅研究会で作成した。この結果が写真-10である。

この模型は公民館で展示され、一般の住民に公開され、その後の三春の住まい、まちづくりに大きな役割を果たした。

## 6. 最後に

今の三春の住まい、まちづくりはこれら一連の三春町住宅研究会を中心とした地元で暮らす人々の不断の努力が結実したものである。

三春住宅研究会は、現在でも活動を続けており、建築の地元の専門家であることから、新しい技術の研鑽にも励み、内外装共に自然素材を生かした伝統工法の住宅でありながらも高断熱性能を実現した高機能、高性能な住まいづくり(写真-11)や、東日本大震災においては、地元の小規模工務店が集まっていち早く木造応急仮設住宅を完成させた(写真-12)。木造によ



写真-11 自然素材を生かした高性能、高機能住宅





写真-12 旧中郷小学校跡木造応急仮設住宅

る応急仮設住宅を地元自らの手でやろうと声をかけると、すぐに集まり建設できたというのは、まさに住宅研究会発足以来の30年の結果の結末とすることができる。

まちづくりには時間がかかる。三春町ではHOPE 計画策定以来30年の月日が流れている。町の中心部にスーパーマーケットが完成し、

HOPE 計画で提案された商業核が実現するまでに29年の月日が流れている。この継続の力はやはり地元で暮らす人々の努力にある。また、現実の町の姿に基づいたわかりやすい計画と、その計画を実行すべき住民と、地元建設関連業者自らが計画立案を行ったことがあげられる。

そして何よりも、単に住民の意見を聞くだけではなく、住宅研究会自らがきちんとした調査を行い、立案した計画内容が地元の人々の間に根付いていることが最も重要である。

三春の住まい、まちづくりはまさに HOPE 計画が目指したもの、そのものの具現化であると言いたい。さらにその結果、現在の高齢社会において最も求められている、歩ける町、コンパクトシティを実現し、最も先進的なまちづくりを現出することにも成功したのである。

進化+創造

**YES, WE CAN.**

株式会社白橋

[www.shirahashi.co.jp](http://www.shirahashi.co.jp)

日本住宅協会機関誌「住宅」を創刊以来製作させていただいております。また、2000年度よりPDF ファイル化しての提供も実現いたしました。